

キリスト教音楽教育とオルガンの役割 ——「石井記念オルガン」設置30周年に向けて——

宮本 とも子

前奏 J.S. バッハ《クラヴィア・ユーブング第3巻》

前奏曲変ホ長調BWV552/1より

賛美歌 《つくりぬしを賛美します》(『讃美歌21』6番)

聖書 詩編107:28-31

苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと／主は彼らの苦しみから導きだされた。

主は嵐に働きかけて沈黙させられたので／波はおさまった。

彼らは波が静まったので喜び祝い／望みの港に導かれて行った。

主に感謝せよ、主は慈しみ深く

人の子らに驚くべき御業(みわざ)を成し遂げられる。

はじめに

フェリス女学院創立150周年記念に向けて、さまざまな企画が立案される中、1990年に学院創立120周年記念事業として設置されたフェリスホールのオルガンは2020年に30周年を迎えようとしています。

学院の至宝ともいえる18世紀ドイツ建造様式で作られたオルガンの誕生から現在までを見守ってきた一人として、この名器が刻んできた歴史とその意義を「演奏とあわせて検証するように」という大きな宿題をいただきました。

本日、ご出席頂いている方々の中には、このオルガンが誕生するまでの経緯を私以上にご存じの方もおられる一方で、このオルガンと接するのが初めて、というフェリス関係者もいらっしゃると思います。約1時間の中で、お手元のプログラムに沿って、話と演奏を進めさせていただきます。

I フェリス女学院と西洋音楽教育

皆さまもご承知のとおり、フェリス女学院は賛美歌歌唱に基づく音楽教育を創立当初から行い「より専門的な音楽教育の実現」を可能にする豊かな土壌を用意してきました。

終戦後、日本中が敗戦のショックに打ちのめされる中、それまで、横浜にも神奈川県にも存在しなかった音楽専門の教育機関を、伝統あるフェリスに創りだすことに将来への夢と希望を見出された音楽家がおられました。それは、日本が世界に誇る音楽家、三宅洋一郎、三宅春恵、大島正泰、藤井典明、團伊玖磨の各氏です。これらの先生方の熱意によって1950年には専門学校、そして1951年にはフェリス女学院短期大学音楽科が設置されてより専門的な音楽教育が始まりました。

音楽科を持った短期大学としては戦後の第1号、そしてその後38年間、「キリスト教の基礎にたった自由をまとい、常に前を向いて恐れず道を拓いて行く」（短期大学音楽研究科長、田中順）との教育姿勢を貫いてきました。

その後、フェリス女学院は、創立120周年を目前にした1989年4月に「プロテスタント教会音楽の研修・研究を中心目的」に据えて、短期大学音楽研究科を改組発展させ、4年制の音楽学部を誕生させました。

II 4年制音楽学部への移行からオルガン設置計画

田中順氏は、「短期大学音楽科が永い間切望していた4年制大学への移行は、今思うとまさに奇跡と思われるような次第で校地購入が実現されて、大きな第一歩が始まり、これは、当時の理事長石井千明氏、学院長中島省吾氏と理事会の賢明な決断によるものであった」（『追想 石井千明』77）と、回想されています。

信仰に篤く、豊かな教養を備えられていた実業家、石井千明氏は、1977年から12年間、フェリス女学院の理事長を務められました。石井理事長は、ご著書の中に次のよう謙虚な言葉を残しておられます。「しかし、音楽学部を創立しても、専用のコンサートホールもパイプオルガンもないような状態であったので、専用のコンサートホールを設置すると同時にパイプオルガンを購入しようということになり、せめてそのための基金にでも、と思い私自身も貧者の一灯となりがしかの献金をさせていただいた。私としては、キリスト教信仰に立つ、この優れた女子民主教育の私学のためにいくばくかの奉仕ができたことを限りなく感謝している。私の貧しい生涯でなしえた一番喜ばしいことであった。」（『心のふるさと』204-205）

III フェリスホールの建設とオルガン建造

米国で出版された論文集、*The Historical Organ in America*の中で、フェリスのオルガンを設計したジョージ・テイラー氏は以下のように書かれています。

「横浜のフェリス女学院にオルガンを建造してもらいたいという、全く予期していなかった依頼を1986年の夏に受けました。これは、女学院が輩出した世界的オルガニスト、林佑子教授が、母校のオルガン設置に際して我々のオルガン工房を推薦されたからでした。そして、フェリス女学院の院長が私たちのオルガン工房を訪ねられ、20個ストップのオルガンを建造する契約を結びました。しかし、これが、後にその倍以上のオルガン建造プロジェクトへと拡大しました。」

林佑子先生は現在、米国在住ですが、2017年11月に米寿を迎えられます¹。戦後間もなく、「本物のオルガンを体験するために」、渡米され、最初は内陸部の学校に進学されましたが、その後、ボストンのニューイングランド音楽院に進まれ、演奏家としての最高学位Artist Diplomaを取得されました。1970年代からは、歴史ある同音楽院のオルガン科主任教授として、また、欧米のオルガン界で第一人者として活躍されました。私もボストンで林先生に師事したオルガニストの一人です。

フェリス女学院のオルガンプロジェクトは、石井理事長からの御寄附が学院予算と同額であったと

1 本講演後、2018年1月7日逝去。

伺っております。そこで、石井理事長からのこの尊い御寄附と学院予算とを合算して世界に誇れるオルガンを建造し、この新設される音楽学部へ林佑子教授ご自身を招聘したいと考え、当初の計画が倍の規模のオルガン設置へと発展しました。石井理事長は、大学教育に期待される5項目の一つに、「特色があり、国際的であること」を挙げておられます。ご自分の寄附の額だけでもオルガンは十分に設置できたわけですが、学院の予算と合わせることで、文字通り、20世紀に建造された歴史的建造法によるオルガンとして、国際的な価値を持つオルガンの建造が実現しました。ここに、私はいつも、石井理事長のモットーであった「Soli Deo Gloria、神にのみ栄光あれ」、という姿勢を拝見させて頂く思いであります。そして、理事会はこのオルガンを「石井記念オルガン」と命名しました。

Ⅳ 米国のオルガン界と「石井記念オルガン」の建造まで

フェリスホールのオルガンはヴァージニア州のスタントンという小さな町の、テイラー&ブーディー・オルガン工房（Taylor and Boody Organbuilders）で造られました。オルガンには、その起源とされる紀元前のギリシャ時代の水圧オルガンから数えると、約2600年の歴史があります。教会で用いられるようになったのが紀元1000年頃からで、時代、地域によって、いろいろな様式のオルガンが生まれています。20世紀に建造されたオルガンの中には、産業革命以降利用できるようになった電気の力を使って、パイプオルガン本体と、演奏台とを遠く引き離すことも試みられました。しかしながら、1950年頃から、現存している歴史的なオルガンと比較して、電気を演奏アクションに媒介させたパイプオルガンでは楽器としての音楽性に欠けることに気づき、米国でも歴史的建造法に忠実に回帰しようと努めるオルガンビルダーが現れてきました。鍵盤操作を電氣的ではなく、歴史的なトラッカー方式でメカニカルに行うことで、演奏者は笛（パイプ）に空気を送る弁の開け閉めを完全にコントロールできることが再認識されました。オルガンケースの中に笛を修める歴史的な方法は音響的にも有効であると確認されました。その他、歴史的オルガンを通して、建造法だけでなく、演奏法についても、歴史的な理論書がひも解かれ、実践される中で、オルガン奏法の歴史も明らかにされたのでした。17世紀、18世紀に書かれた演奏法に関する資料は沢山ありますが、21世紀になってようやく出版された日本語訳の本もあります。

チャールズ・B・フィスク氏は歴史的オルガン建造法を米国で最初に実践されました。フィスク氏は、ハーバード大学で物理学を専攻した優秀な若手研究者でしたが、自分が関わった原子物理学の研究が、後にマンハッタン計画に使われてしまったことに、打ちのめされました。後に、「我々研究者は一人一人が少なくとも5名の日本人の命を奪った事と同じ罪を犯しているので、それを償わなくてはならない」と婚約者への手紙に書いています。そして、フィスク氏は、自分の研究成果が人の命を奪うようなことに繋がることは決して許すことができないと「音楽そのものに仕えるオルガン建造」のためにその後の人生を捧げられました。このような経緯で始められたオルガン建造でしたので、無心に「より良い楽器を『音楽』の為だけに造る」という姿勢は、欧州の歴史的なオルガンに対する研究姿勢にも、米国のオルガン建造家達との交流においても、顕著でした。私がボストンで過ごした学生時代、個人的にもフィスク氏を存じ上げておりましたが、フィスク氏は、林佑子先生にも、私達日本人学生にも、とても親身に接して下さいました。しかしながら、フェリス女学院にオルガン設置企画が持ち上がった時点では、残念ながら、フィスク氏の体調が優れなかったために、次の世代のビルダーとして、林佑子先生はテイ

ラー氏を推薦なさいました。(なお、フィスク氏亡き後、2代目社長スティーブ・ディーク氏就任後、1998年には林佑子氏の推薦により、横浜みなとみらいホールにフィスク・オルガンが設置されました。)

プロテスタント教会音楽の教育に重点を置いているフェリスは、新しく設置するオルガンで「聖書の音楽家」と呼ばれる、ヨハン・ゼバスティアン・バッハの作品が理想的に演奏できることを希望しました。オルガン音楽の歴史を考えても、バッハの作品は頂点に位置し、オルガン建造の歴史においてもその黄金時代として、現在に伝えられています。

*The Historical Organ in America*という論文集には、1982年から1992年までの間に米国の工房が歴史的な建造法で製作したオルガン12台の詳細記録が載っています。このような記録が工房の壁を超えて公表され、分かち合われることは、米国独自の試みであり、その結果としてオルガンの質を著しく高めることに寄与しています。また、米国のオルガン工房には大学でいろいろな分野の勉強をした、幅広い人材が集まっています。オルガン製作の過程には、オルガンケースを創るための大工仕事、笛の材料を作るために、金属を溶かして板を作る仕事、金属板の厚さを微妙に調整して、よりよく響く共鳴管を作る仕事、ふいごに、なめし皮を貼る仕事、鍵盤を作る仕事、など気が遠くなるほどの作業が含まれます。女性がオルガン建造の世界で活躍できるのもこのためです。

上述の論文集の7台目がフェリスのオルガンです。情報がどこまで詳細に書かれているか、ほんの一例をご紹介します。たとえば、金属の笛ですと、錫と鉛の合金でできていますが、錫が77%含まれているパイプでは、一番低いCCの笛の金属の厚さが上部は0.90mm、下部は1.44mm。1オクターブ上のCの笛では、上部0.66mm、下部1.05mm等々。錫含有28%の笛では、ピアノでいう「鍵のド」の笛で上部の厚さは0.60mm、下部では0.93mm。一方で錫含有1.5%の笛では、同じ音に使われる笛の上部の厚さは0.70mm、下部で1.10mm、という具合です。この他に、全ての笛の歌口の高さと同幅が1オクターブごとに記録されています。

オルガンを造りたいと思われる方は是非この論文集をお読みください！

フェリスホールのオルガンには44種類の音栓（笛群）に全部で2,871本の笛があります。

前述のとおり、フェリス女学院が提示した新しいオルガンへのリクエストは、「バッハのオルガン曲が理想的に演奏できる楽器」でした。「バッハが理想としたオルガンとは？」という問いかけはオルガン建造家達を最も鼓舞するものであることは確かですが、これといった、ひとつだけの正解があるものでもありません。林佑子先生は、折あるごとに「悪い答は少ないけれど、良い答は沢山ある」と言われていたことを思い出します。

石井記念オルガンの建造には、バッハが活躍した北ドイツ各地のオルガンを調査研究した成果が直接反映されています。テイラー氏は、「このオルガンを通して、米国でのオルガン建造が、現在、欧州で行われているオルガン建造の単純な模倣ではなく、独自で行っている歴史的オルガンの研究に基づいていることと、高い音楽性を目指しているということを日本の皆様にご理解いただけたら幸いです。」と述べています。なお、石井千明理事長のモットーと同じく、Taylor and Boody Organbuildersのオルガン建造のモットーもSoli Deo Gloriaです。そして、このオルガン工房は教会や教育機関に限定してオルガンを造っています。オルガン工房のホームページには、建造された楽器の一覧が記載されておりますので、是非ご覧ください。

V いざ設置！

オルガンは、まず工房で組み立てられ、楽器として機能し細部に至るまで問題が無い事を確認したのちに、改めて設置場所へ移送するために解体され、梱包されます。フェリスホールのオルガンの場合、ヴァージニア州スタントンのオルガン工房で、全てのオルガンパーツが2週間かけて、4tと2tのコンテナに梱包されました。そして、このふたつのコンテナは「船便より数週間早く到着させたい」というフェリス女学院の要請で空輸されて参りました。当時の大脇局長が「ぎっしり詰まったコンテナにはもうウサギー匹入らない」とコメントなされたほどの見事な梱包術は“The Art of Packing!”と私たちを感嘆させたものでした。

1989年夏のある朝、大型のトラックと中型のトラックが、山手通りに横付けにされました。米国からオルガンと一緒に到着したオルガン技術者3名が中身を次々と運び出します。フェリスホールにはまだ椅子も何もありませんでした。オルガンパーツが次々と並べられ、だんだんに、このホールの床は足の踏み場もない状態になりました。小さいパーツの運び入れは、当時の中島省吾学院長、大脇順和事務局長や私も手伝い、6時間以上かけてようやくコンテナ二つを空にすることができました。

本来、海外から物を輸入するときには、港や空港で税関検査が行われますが、部品の多いオルガンをそのような場所で開梱する事は不可能でしたので、学院が前もってこの建物を保税倉庫として扱う認可を得ました。その代り、通関士の訪問があるまでの期間はこの建物を封鎖し、誰も中には入ることができませんでした。

夏から3か月以上かかったオルガン設置には思い出深いことが沢山ありますが、その最初の一つとして、通関検査のことをお話しいたしましょう。通関士がホールの検査に見える日時をフェリスは前もって知ることができませんでした。通関当局から、突然「今日の午後検査をします」と連絡が来ました。当時私は東京に住んでおりましたので、大急ぎで、フェリスホールに駆けつけ、このオルガンが研究と教育のための楽器であり、電気が利用される以前の18世紀建造様式に従って、人力の送風装置があることを一生懸命説明しました。音楽を全くご存じない通関士にどうやってこの内容を説明したらよいか一瞬戸惑いましたが、「尺八」を例に出して、オルガンにとっても、如何に「息」が大切かを説き、国内に前例のない事例として輸入の税金を免除していただくことができました。

VI 石井記念オルガンが育てたオルガニスト達

オルガンが設置されてから今までにオルガン専攻として音楽学部に進んだ学生は43名程おります。33名は高校卒業後すぐに入学され、10名は他の短期大学、大学、または大学院を卒業なさってから入学されています。現在、音楽学部には、二つの専攻をもって卒業できる第2専攻実技という形があり、3年生から二つ専攻楽器等を学ぶことが出来るようになっていきます。このシステムにより、入学後にオルガン専攻に加わる方も増えています。「オルガンとの出会いはフェリスに来てから」という学生が圧倒的に多いので、この第2専攻実技のシステムは、オルガンを専門的に学んでいただくために大変に有効な道筋であると感じております。

少ないオルガン専攻学生ではありますが、過去に海外へ留学した学生数は9名、そして、オルガンを副科で学んで、その後欧州でオルガンを続けたピアノ科の卒業生が2名おります。45名（内2名はピ

アノ専攻で卒業) 中11名が海外に出ていますので、留学率は24%という高い数値になっております。

現在もフランスで2名の卒業生が学んでおります。米国に出た2名の学生は現在、オルガン建造家として、そしてもう一人はプロフェッショナルな教会オルガニスト・教育者として活躍しています。ピアノ出身ながら、オルガニストの道を歩んでいる一人は、ドイツ、オランダに留学後、現在スペインで博士課程に在籍しており、ピアノとオルガンで良い活躍の場を与えられているようです。

フェリスには、音楽学部、音楽研究科、そしてディプロマコースがあります。学部からディプロマコースに進む学生もおりますが、全く外部からこのディプロマコースで学ばれた13名のオルガニストも活躍されておりますので、この方々の、フェリスに来られた時の最終学歴をご紹介します。

- ・フェリス女学院短期大学音楽科 (1名)
- ・東京純心女子短期大学 (1名)：後に東京芸術大学博士課程修了
- ・フェリス女学院大学他学部 (1名)
- ・東京キリスト教大学 (1名)
- ・武蔵野音楽大学 (2名：内1名はピアノ科卒)
- ・武蔵野音楽大学修士課程修了 (2名)
- ・早稲田大学 (1名)
- ・東京芸術大学 (3名：内1名は作曲科卒)
- ・東京大学文学部学士課程および修士課程修了 (1名)

このように優秀な音楽家を外部からディプロマコースにお迎え出来たのはひとえに、石井記念オルガンの高い音楽性によるものですが、それだけではありません。林佑子先生同様、ニューイングランド音楽院のArtist Diplomaを修得され、現在、横浜みなとみらいホールのオルガニストとして沢山の企画立案、オルガニスト育成に努められている三浦はつみ先生、そして、ドイツで教会音楽科に学ばれ、カントールの資格取得後現在、東京キリスト教大学で音楽主任を務められている宇内千晴先生、そしてまた永年フランスで活躍された後、東京芸術大学で教えられていた早島万紀子先生方の素晴らしい教育力に負うところが大きいのです。

Ⅶ 音楽学部のキリスト教音楽教育

オルガンを専攻する学生以外に、フェリスの音楽学部には副科授業でオルガンを学んだ学生たちがギネスブックに登録できるほど沢山おります。その数は、オルガンの授業レッスン履修が必修であった学部創立から10年ほどの間には800~1,000名。その後、自由選択になっても毎年延べ100名近くがオルガン関連科目を履修しておりますので、1,200名くらい。あわせると2,000名は下らない数になります。林佑子教授が就任されてからの10年間はオルガンのクラスがホームルームのような機能も果たしておりました。最初は1クラス6~9名、私たち5名のオルガン教員が全部で10クラスのオルガン実技授業を担当し、音楽学部の学生全員の姿を把握しておりました。このクラスの中で初めて賛美歌とオルガンとに出会う学生達ですが、15回の授業で、前期の終わりには4声体の賛美歌を3~4曲ペダル鍵盤も付けて

演奏できるようになります。教会暦に沿って、一人一人違う賛美歌を割り当てますので、1年の終わりには、クラス授業を通して100曲くらいの讃美歌に親しむことになります。現在、必修授業はなくなりましたが、選択必修授業としてオルガン実技のクラスやオルガン研究授業を履修する学生は多く、オルガンを用いたキリスト教音楽教育の伝統は続いております。2017年度前期にもオルガン関連授業に延100名以上の学生が登録をしておりました。一曲の賛美歌には複数の聖書箇所引用がありますので、すぐに、新約聖書、旧約聖書に思いを馳せることができます。クラスの中では自然な形で「み言葉」の分かち合いが行われ、年に何回かは近隣の教会の主日礼拝に参加する課題も与えております。

2600年のオルガン年表を見ていただくと、黒船ペリーの来航、開国、西洋音楽の導入がいかにオルガンの文化をそぎ落として行われてしまったかということを実感していただけたと思います。

VIII 教育楽器オルガンの展望 ～150年後を見据えて～

ロベルト・A. シューマンが「こどものためのアルバム」作品68に記した文章をご紹介します。う。(音楽の座右銘Musikalische Haus-und Lebensregeln)

教会の側を通り過ぎる時、オルガンの演奏が聞こえてきたら、入って聴くように。もしうまくいってオルガンの椅子に座れたら、君の小さな指で弾いてごらん。音楽の非常に大きな支配力に驚くだろう。オルガンを練習する機会があったら逃さないように。作曲と演奏に不純でいい加減な点があると、オルガンほどたちどころに復讐する楽器は無い。

Gehst du an einer Kirche vorbei und horst Orgel darin spielen, so gehe hinein und hore zu. Wird es dir gar so wohl, dich selbst auf die Orgelbank setzen zu duerfen, so versuche deine kleinen Finger und staune vor dieser Allgewalt der Musik. Versueume keine Gelegenheit, dich auf der Orgel zuueben; es giebt kein Instrument, das am Unreinen und Unsauberen im Tonsatz wie im Spiel alsogleich Rache naehme als die Orgel.

[音楽之友社発行 ウィーン原典版49. シューマン：こどものためのアルバム作品68、p. XXIVを訳出。なお、p. XXVI f.に訳者不明の日本語訳が掲載されている。また、シューマン著 吉田秀和訳『音楽と音楽家』(岩波文庫、1958年)p. 199にも訳文あり。]

西洋音楽の導入に由来する問題として、日本ではピアノとオルガンとの間には目に見えない厚く高い壁が存在するように思います。しかしながら、上述のシューマンの記述でも明白なように、現在、ピアニストの方々が演奏する曲目を作曲した音楽家たちの多くはオルガニストでもあり、オルガンの教育力を熟知されていました。

現在日本で活躍されている40代後半以上の方々ご自身が音楽大学に学ばれていたころ、フェリスホールのオルガンほど、音楽性の高い楽器は国内にはほとんどありませんでした。ですから、オルガンに興味を持たれる方が少ないことは十分に理解できることです。

音楽性の高いオルガン、それは、まずヴァイオリンのように、熟練して初めて良い音が出せる楽器なのです。オルガンの笛一本一本に如何に息を吹き込み、しゃべらせることができるか。果てしないチャ

レンジではありますが、この楽器に魅せられ、名曲を残した歴代の作曲家たちの作品と出会えることはこの上なく大きな喜びです。まして、聖書の言葉が題材として扱われることの多い楽曲と出会うことができるというのは、特別なめぐみです。そして現在も新しい曲が作られ続けていることは希望であります。

オルガンは構造を学ぶとき、とてもよい理科の教材になります。また、オルガンの歴史を学ぶとき、とてもよい社会の教材になります。そして何よりも、持続音の出る和声的な楽器として、音楽の基礎を学ぶときにとっても役に立ちます。これからは、義務教育の中でオルガンをどのように紹介していけるかを真剣に考えていくべきだと思います。

本格的なオルガンが国内に建造されてからまだ日が浅いので、音楽教育に活用する可能性も開拓の余地も沢山残されている楽器です。フェリスに学ぶ学生たちは大学に来て初めてオルガンに出会っていますが、今の小学生、中学生は各地のコンサートホールや教会で行われる音楽イベントでオルガンを見聞きし興味を抱いております。この若い世代にいかにしてアウトリーチできるかが将来の教養教育の可能性を左右するものであると感じております。なぜなら、このようなオルガン体験は、日本人とキリスト教文化との貴重な接点に成り得ると思えるからです。

現存する15世紀、16世紀のオルガンを体験する時、この石井記念オルガンは500年以上の寿命を授かっていると申し上げても過言ではないと思います。しかしながら、現在、フェリスは創立150年のお祝いの時ですので、その先150年後に思いを馳せ、フェリス創立300年に向けて、主の学院へのお恵みとお導きを祈ります。

「大学」という制度が今後どのように変化したとしても、フェリスの中でオルガンという聖書の御言葉に基づく音楽を奏でる道具が忘れ去られることはないと感じております。

予期せぬ、とてももったいないお導きにより、私は企業駐在員の家族としてワシントンDCに滞在していた時に、このオルガンのために造られた最初の笛を見せていただきました。そして、オルガンが設置される半年前に、一家で帰国。その後、フェリスに勤務することになり、フェリスホールで楽器の完成までを見守り、その後、2017年の現在までオルガン担当の専任教員として優秀な非常勤講師の方々と共に学生達の教育に携わっております。

このオルガンの将来を考えたとき現時点では、目に見える形での安心はありません。しかしながら、少子化に拍車がかかり音楽の道を志す中高生が激減している大変な時期だからこそ、目に見えないお導きとお恵みとを信じてまいりたいと存じます。

フェリスは不思議な場所です。私ごとで恐縮ではございますが、フェリスに勤務させていただいたことで、私の母方の祖母の祖父が、宣教師フルベッキのもとで聖書を学んでいたことを知りました。しかも1868年5月4日に、フルベッキがJ.M. フェリス博士にしたための手紙の中に、この5代前の祖父の名前を見つけて背中に電流が走るような衝撃を受けました。その時から149年経た今、こうして私がフェリスのオルガン担当者として、ここでお話をさせていただいておりますことをだれが想像し得たでしょうか。ですから、フェリス女学院の歩みの中に与えてくださったこのオルガンを、神様は150年後にもお見捨てにはならないと確信しています。

ご清聴ありがとうございます。これから、20分ほど、オルガンを演奏させていただきます。

演奏 J.S. バッハJohann Sebastian Bach(1685-1750) の作品より
《オルゲルビュッフライン》より (コラール邦訳 石田友雄)

聖霊降臨祭：

来て下さい、創造主の神聖霊よ BWV 631

主イエス・キリストよ、私たちを顧みてください BWV 632

愛しまつるイエスよ、私たちはここにいます BWV 633

カテキズム：

天の王国にいます私たちの父よ BWV 636

救いは私たちにあちらから来た BWV 638

キリスト者の生活：

私はあなたに呼びかけます、主イエス・キリストよ BWV 639

十字架、迫害、試み：

愛する神にのみ統べ治めていただき BWV 642

《クラヴィア・ユーブンゲ 第3巻》より終曲

フーガ変ホ長調 BWV 552/2

祈 禱 鈴木 佳秀 学院長

旧校歌 フェリス和英女学校校歌《港に望み丘の上に》(寺田醇造作詞)

参考文献

石井武子編 1994『追想 石井千明』春秋社。

石井千明 1989『心のふるさと』春秋社。

高谷道男編訳 1978『フルベッキ書簡集』新教出版社。

中島省吾、ジョージ・K・テイラー (宮本とも子訳) 1989『Soli Deo Gloriaただ神にのみ栄光あれ』フェリス女学院。

渡邊 明 1997「フェリスと音楽教育：音楽学部の背景とかたち」『エピストラ』第14号1。

英語文献

Edwards, 127-147. Easthampton, Mass.: The Westfield Center for Early Keyboard Studies.

Owen, Barbara. 1995 *Timeline of the Organ*. Seattle, WA: The Westfield Center.

Taylor, George. 1992 "Ferris Jogakuin (Ferris Girls' School), Yokohama, Japan. Taylor and Boody Organbuilders, opus 17, 1989." In *The Historical Organ in America*, ed. by Lynn

(みやもと・ともこ)

フェリス女学院大学音楽学部教授